be エンタ

堺雅人という役者はつかみどころがない。個性的だなと感じた瞬間、オーソドックスな一面が見えてくる。「計算された演技」と書こうとすると、無手勝流に思えてくる。

新作「ひまわりと子犬の7日間」で演じた保健所職員の神崎にも、彼の不思議な空気感が見事に生かされている。神崎は野犬の殺処分を担当しているが、そのことを小学生の長女に知られてしまう。「頼りなくて優柔不断なお父さんなんだけど、きれいごとじゃない部分に対し、ちゃんと立ち止まり、口ごもることが出来る。とてもステキなことだと思います」

映画「ひまわりと子犬の7日間」主演

堺　雅人

脚本・監督は山田洋次監督の下で「母べえ」などの脚本を担当した平松恵美子。犬と子供が主役という「泣かせ映画」の王道を行くが、甘さはなく、現実を見据えている。「映画に入る準備として実際の保健所の方にお会いしました。彼は動物を愛してやまないのに、動物の命を奪う仕事に就いている。殺処分を待つ犬たちの顔を一匹一匹見せてもらいました。今回はそれだけで十分でした」

殺処分という制度を声高に否定するのは簡単だ。しかしすべての野犬に救いの手を差し伸べることは出来ない。神崎はそのはざまに立ち、常に葛藤しながら、諦めることなく最善を尽くし続ける。「収まりのいい論理じゃないのが、この映画の面白いところ。偽善的なきれいごとでもないし、シビアな問題提起だけでもない。平松さんの脚本は本当にステキでした」

複雑な物語の複雑な役に好んで挑み、完璧に演じきる。観客にはそのような演技の虫に見える。しかし演技論に話を持って行こうとすると、そう簡単には答えてくれない。

「スケジュールが空いていれば何でもやります」「笑わせたり泣かせたりするのは監督の仕事。僕たちはやれと言われたことをやるだけです」

昨年の当たり役で4月に単発ドラマとして復活する「リーガル・ハイ」の弁護士、古美門研介についても「古沢良太さんの脚本が素晴らしい。棒読みしても面白くなることは分かっていた」と話す。「ただ早口のキャラクターは自分で勝手に作っちゃったんで、今四苦八苦しています」。つかみどころのない堺雅人の演技の秘密に、ほんの少しだけ触れられた気がした。

文・石飛徳樹
写真・門間新弥

さかい・まさと　1973年、宮崎県出身。92年、劇団東京ンジの旗揚げに参加。映画出演作に「クライマーズ・ハ「クヒオ大佐」「ゴールデンスランバー」「鍵泥棒のメド」など。「ひまわりと子犬の7日間」は全国公開中。

介護「決めるのは家族」

医師が見た 映画「愛、アムール」

老老介護を描き、アカデミー賞外国語映画賞に輝いた「愛、アムール」（ミヒャエル・ハネケ監督）が公開中だ。在宅診療に力を入れ700人以上の患者をみとった兵庫県尼崎市の医師、長尾和宏さん（54）＝写真＝に映画を見てもらった。

「パリが舞台ですが、介護の現実は尼崎とあまりにも似ている。映画には高齢社会が抱える課題が盛り込まれている」

主人公の老夫婦ジョルジュとアンヌはともに音楽家。穏やかな余生を過ごしていたある日、アンヌがジョルジュの言葉に反応しなくなる。手術もうまくいかず、半身が麻痺してしまう。「二度と病院に入れないで」というアンヌの懇願に、ジョルジュは自宅で介護を始める。

離れて暮らす娘は、きちんとした施設に入れるように力説する。「ジョルジュは娘の非難で孤立を深めてしまう。一言でも感謝の言葉をかければ、どれほど力づけられたか」

長尾さんは、患者が穏やかに死を迎えられる「平穏死」を提唱している。そのためには医師が往診する在宅医療が必要という。「多くの病院は延命に力点を置き、必要以上に薬を投与し、胃に管を通して水分や栄養を入れる。患者が苦しむだけです」

ジョルジュは雇ったヘルパーと意見が合わず解雇し、1人で献身的な介護を続ける。「映画から浮かび上がるのは夫婦愛です。親の介護をどうするのか、決めるのはそれぞれの家族。映画には考えるヒントが詰まっている。見終わってから語り合って欲しい」

（長谷川千尋）

新連載「コヤブパニック」ええボケ待ってまっせ

4月から月曜夕刊で「笑」の面が始まります。目玉企画は、吉本新喜劇の小籔千豊（かずとよ）座長がホストをつとめる読者参加の大喜利「コヤブパニック」。小籔座長が出すお題への回答を募ります。特に面白い作品を小籔座長が選び、コメント付きで紙面で紹介します。

1回目のお題は「関西の『ゆるキャラ企画会議』でボツにされたキャラクター案って？」です。回答を明記し、住所、氏名、年齢、電話番号を書き添え、メールでkoyabupanic@asahi.comにお送りください。投稿できる回答は一つまでで、20字以内でまとめて下さい。締め切りは24日。掲載時に匿名希望の方は、ペンネームも書き添えて下さい。

小籔座長の鋭いツッコミが爆発する楽しい「ボケ」回答をお待ちしております。どうぞ、お気軽にふるってご参加ください！

（篠塚健一）